

希望をつなぐ

木田 裕子

まえがき

「何かせずにはいられない」

2012年3月11日に東日本大震災がおきた直後の私の気持ちでした。

私は、3月16日に母子疎開支援ネットワーク「^ハ^ハ^コhahako」（以降「hahako」と略す）を立ち上げ、現在まで福島をはじめとする原発事故からの避難・疎開支援活動を続けてきました。活動を通して、同じような気持ちを持っている人がたくさんいるのだということを知りました。一人ひとりが「できること」は小さなことかもしれませんが、それをひとつずつ繋いでいくことで、大きな流れが作られるということを実感したのです。

現在「hahako」の活動目的は、大きく分けて「情報提供」「疎開サポート」「支援者の連携」の3つです。私自身、これまでボランティア活動をした経験もなく、専門的な知識も何もなかったのですが、活動を続けるなかで、人と人をつなぐことが私の役目なのだと実感するようになりました。「情報提供」では受け入れ先提供者（ホスト）と利用者（疎開者）を、「疎開サポート」では疎開者同士を、そして「支援者の連携」では支援者同士または支援者と疎開者をそれぞれつなぐことで、支援活動を広げることができました。このつながりや流れがどのようにしてできてきたのかを、私自身が振り返りながらお伝えしたいと思います。

きっかけと経緯

「なぜ避難・疎開支援をしようと思ったのか」ということをよく聞かれます。当初は、ただ胸がざわざわして居ても立ってもいられないほどで、最初から大きなネットワークを作ろうということは考えていませんでした。特に普段から災害のボランティアをやっていたわけでもない私が、「hahako」を立ち上げ運営してきた経緯は次のようなことでした。

震災当日は、防寒の物資を送るくらいならできるかなと考えました。ところが、被災地への交通が規制されていたため、物資を現地に届けることは難しい状況でした。仕事と家庭がある私には、被災地に復興支援に行くこともできません。特別な知識も経験もない私が、資

ポスト福島の哲学

金をかけずにできることはなんだろうとあれこれ考えました。そして、インターネットで情報を調べているときに、ある掲示板の書き込みに目が留まったのです。「小さい子どもがいて、原発事故の影響が心配だけど、私も夫も福島県から出たことがなく、親戚も知り合いもない。西日本に避難したいのですが、どうしたらいいでしょう」というような内容でした。その書き込みへのコメントは、「甘えるな」「こんなところでそんなことを聞くな」など否定的なものばかりでした。私は投稿者が不安で心細く、他に相談する手段がないのだろうと思いました。「お手伝いしますよ」と書きたかったのですが、現実的に考えると簡単にそんなことを言えるわけもなく、何も書けませんでした。その夜は、ずっとその人のことが気になっていました。翌日その掲示板を見ると、その書き込みは消えていました。その時、途方にくれて助けを求めている人に言葉すらかけてあげられなかったことをとても後悔しました。否定的な批判的なコメントばかりで、きっと傷ついたのでしょう。今になって思えば、きっと東北から西日本に避難することは、外国に行くくらい気持ちの上で大変なことなのだったのでしょうか。

このことがきっかけで、被災に加えもうひとつの「原発事故」の影響で同じように不安で困っている人がいるのではないかと、考えるようになりました。東京に住む知人に連絡をすると「子どもたちは親戚や実家（西日本の）に預けた」という人も多く、西の知人を頼って家族で避難した人もいました。これをきっかけに「私が西にいながらできること＝避難疎開支援」をやろうと思いついたのです。

まずは、三重県で活動している NPO やボランティアに当たってみることにしました。三重県は山が多いので自然学校や NPO も多く、避難できそうな施設もあると思ったからです。ところが、元々繋がりがあったわけでもない人間がいきなりこんな提案をしても「大変ですね。がんばってください」と言われるだけで、本気で取り合ってくれるところはありませんでした。考えてみれば、避難や疎開支援など存在しなかった時期でしたので、ピンと来なかったのかもしれませんが。知り合いには、「避難・疎開支援なんて他人の生活を丸ごと支援するなんて無理だ。中途半端な支援だと無責任になってしまうのではないか」など苦言をもらいました。確かに避難や疎開となるとその人たち家族の生活のことまで考えなければならぬんだと気づき、自力で避難先を準備してそこに迎え入れるのではなく他に何らかの方法はないかと考えました。いろんな人に話を聞いているうちに、何かしたいけれど何をしたいかわからないという人は多いことがわかり、部屋を提供したいが被災地に知り合いもないし、どこに伝えたら必要な人に届くのかかわからないという声も聞きました。それならば、避難先を提供したいと思っている人を探し、その情報をまとめて被災地に届けようと考えたのです。

希望をつなぐ

そこで、3月15日に全国各地にいる知人に、声をかけました。数名の知人が賛同してくれ、そのうちの一人が twitter を通して「避難先を提供してくれる人」を募集しました。すると、思った以上に反応があり、避難をお手伝いしたいと考えている人がたくさんいることがわかりました。また、情報と同時に提供者の気持ちや思いのこもったメッセージも届きました。これらのメッセージに勇気づけられましたし、文字を通して少なからず提供者の人柄も伝わってきたので、住宅情報のような箇条書きにするのではなく、いただいたメッセージもすべてそのまま掲載したい、と感じました。こうして集まった情報を掲載する簡易的なブログを3月16日に立ち上げました。

この時は、まだ避難者支援のネットワークなどは意識しておらず、ただ「情報を集めてそのまま流す」ということのみが目的でした。その後、毎日数十件の情報は集まりましたが、本当に必要としている人たちに届いているのだろうか？という疑問が出てきたのです。twitter でブログのアドレスを何度も発信してはいるものの、避難所にいる人たちはインターネットすら利用できないのではないかと考え、集まった情報を紙媒体で印刷してそれを配布することになりました。しかし、発足メンバー6名中東京在住者は3名しかおらず（残り3名は、広島・愛知・三重）人手が足りないだろうと、配布ボランティアを募集することになりました。twitter で呼びかけたところ、1日で20数名集まりました。その時数名の人から「自分でもできそうなことをやっと思いつけられて嬉しい」と言われたことが印象に残っています。情報を印刷し冊子にする際に、電話でも相談できるようにと電話番号や代表メールアドレスなども急遽準備し、これを機に団体名もつけようということになり、「母子疎開支援ネットワーク hahako」（以降、「hahako」と略す）が誕生しました。

「hahako」の活動

ボランティアのうちの一人がデザイナーだったこともあり、冊子のデザインや印刷、ロゴのデザインもあっというまに完成しました。こうして、「hahako」第1号の情報冊子が完成し、3月19日に東京都にある一時避難所3箇所に配布にでかけました。その後も数回に渡り、東京以外でも埼玉や神奈川の一時的避難所にも配布し、またジャーナリストや復興支援のボランティアの方が、預かり現地での配布に協力をしてくださるというケースも出てきました。それでも福島県内は、どこも混乱していて各地域に届けるのは困難でした。宮城県では県内のボランティアグループが早くからネットワーク化していて横のつながりが強かったため、一箇所に送ったものを仙台市内の一時的避難所（500箇所程度）にすべて配布していただきました。

ポスト福島の哲学

こうして、「hahako」の活動が動き出しました。疎開支援自体が今の時代存在しない支援活動でしたし、ノウハウもなかったので、試行錯誤しながら柔軟に軌道修正しながら進めていくしかありませんでした。避難先情報を伝える相談窓口（電話とメール）を開設しましたが、被災地では避難のための相談窓口というものがなかったようで、「hahako」の名前はあつというまに広まりたくさんの相談が来るようになりました。当初は「情報提供」が目的だったのですが、相談内容が避難先情報ではなく避難を迷っている人、不安な気持ちを周囲に理解してもらえず苦しんでいる人、放射能の危険性をたずねてくる人、情報には載っていない特定の地域のことを知りたいという人、本当にさまざまな人が相談に来られていました。

相談を受けるうちに、情報提供だけではなく「疎開サポート」も必要なだと気づきました。ここから「hahako」の活動目的が2つになりました。一番難しかったのは、放射能の影響や健康被害についての相談や、精神的に不安定になって家族や職場での人間関係に悩む人たちの相談などです。中には疎開できない（しない）人からの相談もあったのですが、「hahako」の立場を明確にする必要がありました。私たちは、医者や科学者のような専門家でもなく、避難が必要かどうかなどを判断する立場でもありませんので、あくまで不安な気持ちを持った相談者に寄り添うという立場を通してきました。原発事故による被ばくについては、放射性物質の危険性云々よりも、相談者が未知のものに対して抱く不安な気持ちは目の前の事実として受け止めようということです。安全だと言われても不安が消えない人はたくさんいました。ただ、不安がることで周囲との人間関係で距離が生まれたり、疎外されていく。そしてますます追い詰められて孤立していくケースが非常に目立ちました。これは避難以前の問題だと感じました。「hahako」という、放射能への不安な気持ちを話せる場があるということ、避難をサポートしている人たちがいることを伝え続けることで、希望を持ってもらえたのではないかと感じています。一度気持ちの整理が付き始めると、避難するかしないかということを考えられるようになり、避難を選んだ人は避難先探しに入ります。避難しないことを選んだ人は、できるだけ被ばく量を減らすための工夫をします。このような事情や立場が入り組んでいるため「疎開サポート」とは言っても、疎開するしないに関わらず相談されれば必要な情報をできる限り伝える努力をするという方針でやってきました。相談メールはどんな内容のものでも何かしら必ず返信する、という姿勢も「hahako」として気を配ってきたことです。

3月～4月にかけては関東からの相談が圧倒的に多く、毎日20～30件の相談が来ていました。私は仕事をしているのですが、仕事が終わって携帯を見ると着信履歴が20件ほどあり、自宅に帰るとメールが10件以上あるという日々が続きました。原発事故で放射性物質が漏洩

希望をつなぐ

しているという事実が公表された4月末以降は、東北からの相談も急増しました。なぜ1ヶ月以上経って急に増えたのか、と疑問に思いました。事故の影響が深刻であればそのうちもっと避難区域（公的な支援を受けられる地域）が広がるのではないか、避難するための補助が出るようになるのではないか、などという期待を持っていたことを数名から聞きました。しかし、2ヶ月近く経っても対応は変わる様子はなく、小さい子を持つお母さんたちは精神的にも限界が来てしまい、自費で動くことにしたという人が多かったのです。事実が公表されるまでは、「万が一放射能が漏れていたら」ということが不安で、妊婦さんや乳幼児を持つお母さんたちは、事実がはっきりするまで一時的に避難したいという希望が多かったのですが、受け入れ提供者側はあくまで「被災された方の支援」と考えていた方が多く、原発事故による放射能の影響で避難される方などは対象にはしていませんでした。ましてや関東からの避難者などは無料で受け入れてくれるところなどほとんどありません（現在も同じ）でした。相談者からすると相談窓口は1つなので、顔も知らず得体の知れない団体の窓口に電話をすることはとても抵抗があるとおもうのですが、それでも「どこに相談していいかわからない」ということで恐る恐る電話をしてこられるのです。「みなさん同じですよ」という言葉を聞いた途端に、「え！私だけじゃないんだ！」と急に声のトーンが変わり、最初は涙ぐんで取り乱していた人も最後には必ず落ちついた声になり、「ありがとうございます」「がんばってみます」とくくられます。実際、毎日数十件の相談を受けていましたが、内容は本当に似たものが多く、前述のように避難相談というより、気持ちのやり場がないようなものが多数でした。私は同じような相談を受けているのでそう感じられましたが、相談者は自分だけがそんなに不安なのだろうかと悩んでいました。必ず返信すると決めたのですが、さすがに対応が厳しくなってしまう、対策を考えることにしました。ある日の相談で「もし、他に自分と同じように悩んでいる人がいるなら直接話ができないか」と尋ねられました。それがヒントになり、相談者同士が交流できる場を作ろうと思いついたのです。これが、「hahako*cafe」（以降、cafeと略す）です。無料のレンタル掲示板だったのですが、2日で60件の書き込みが来たのは予想以上で驚きました。それほど必要とされている場だったということでしょう。cafeを設置した成果があり、気持ちを吐き出すことを目的とする相談が減りました。

cafeに書き込む人は、きっと誰でもいいから自分の不安な気持ちを受け止めてほしいと思っているのだろうと考え、最初は「hahako」スタッフが交代で書き込みに対し何らかのコメントを書いていました。1週間も経つと、徐々に利用者同士でコメントを付け合うようになり、自然に交流の場としての機能ができてきました。その後、ある程度気持ちが落ち着いた人から、避難についてのより具体的なやり取りがしたいという要望が出てきました。例え

ポスト福島の哲学

ば「九州に避難したいが、実際避難した人から不動産屋の情報が知りたい」などです。個人的なやりとりをするには匿名で不特定多数が閲覧書き込みできる場はふさわしくなかったので、急遽「hahako*cafe2」というもうひとつの掲示板を立ち上げました。こちらは、パスワード制の掲示板で利用者は事前に申し込みをしてパスワードを取得するというシステムでした。ただ、パスワードを他言すれば誰でも閲覧できてしまう難点がありました。どんな人が何人くらい参加しているのかわからないという不安を減らすために「必ず自己紹介をする」というルールを設けましたが、残念ながら8月の時点で500名以上の利用者のうち半数も守られませんでした。cafeのほうも、スパムや宣伝目的のような書き込みが増えたり、匿名性が高いため相手を傷つける表現なども出てきたため、閉鎖をすることも検討しました。cafeは気軽に見られる疎開に特化した貴重な場として浸透していたようで、利用者からは閉鎖に大反対されました。そもそも口コミで広まったのか、cafeの書き込みで「こんなサイトありますよ。知ってました？」と「hahako」のことが書かれていたりしたこともあり、ちょっと笑ってしまいました。「hahako」が主催しているということも知らずに利用されていたわけですね。

もうひとつ、前述にもありましたが、関東からの書き込みの勢いがすさまじく、東北（被災地）の人が書き込めないという意見もありました。この頃から関東と東北の間には疎開者同士の対立ともいえる関係があちこちで見られましたので、東北の利用者のために「hahako*cafe3」という専用の掲示板も設置していました。

こうして、いろいろ問題が山積みになってきたので利用者とも相談しながら、完全登録制のSNSを利用することにしました。cafe2は特に人気が高かったのですが、SNSは苦手意識がある人も多く、移行するなら利用しないと反対した人もいました。ところが500名以上いた利用者のうちSNSに移行してからも400名近くは再登録されています。やはり、お母さんたちにとってcafeのように、疎開に特化した場が貴重だということを再認識しました。mixiやfacebookなどのSNSを利用することも考えたのですが、つながりがある人にいろいろ知らるのが不安で思うように発言できない、利用自体に抵抗がある（苦手意識）などという意見が多くありました。周囲から理解されていない人が多かったことも理由なのですが、そのようなこともあって、疎開に特化したメンバー制（書き込みも閲覧も利用者しかできない）の場、新「hahako*cafe（SNS）」として2012年9月にスタートすることになったのです。

避難を考えている人からの相談については、基本的に利用者は、ネットや冊子に掲載された「受け入れ提供先」に直接連絡をとることになっているのですが、どこに避難していいかわからない人や、その他のいろいろな条件が細かくあるようなケースは、掲載から探すのは

希望をつなぐ

難しいので「hahako」に電話やメールの相談がきます。例えば、「名古屋より西ならどこでもいい」「家賃無料」「保育園と幼稚園が近い」などです。掲載情報だけでは判断しかねる場合や、その他の情報を知りたい場合は、これまでに「hahako」に掲載して下さった受け入れ提供者に地域の情報や相談業務を引き継いでもらうことも増えてきました。ただ、このやり方では、「名古屋より西」にいる複数の支援者の方に連絡をとり相談者とつなぐ、うまくいかなければまた他の支援者を探しつつなぐ、ということの繰り返しとなり、かなりの手間と時間がかかるのが難点でした。そこで、「hahako」のみが繋がっていた支援者同士を一度に繋ぎ、「避難疎開支援に特化した」ネットワークを作ろうと考えました。「ソカイノワ～疎開の輪～」です。このネットワークのメリットは、手間と時間の短縮だけではなく、地域の人でなければわからない細かい情報が伝えられることもありました。〇〇市の市営住宅は、産婦人科が近くにないので県営のほうがいいかもしれない。〇〇市は幼稚園が定員オーバーしていて入れない。などです。こうして、「支援者の連携」の必要性が高まり「hahako」の3つ目の目的として加わりました。「ソカイノワ」には、全国25都道府県から70名が参加し、サイト上の相談窓口へ寄せられた相談に臨機応変に対応できるようになりました。相談内容は、避難のみにとどまらず、滞在している家庭で授乳用の水が心配だというような相談や、子どもたちをできるだけ低線量の地域でリフレッシュさせたいということから、部活の遠征試合の相手先を探してほしいという相談もありました。こうして、水の提供メーカーから安全な水の提供をしてもらったり、部活の交流試合が県をまたいでいくつも行われたりしたのです。本当に必要な支援を必要な人に繋ぐ、という意味ではこのネットワークは機能を十分果たしていると思います。

こうして、2011年7月までに「hahko」の活動は3つになり、これを続けてきたのですが、夏休み直前から少しずつ公的な避難先の選択肢が減ってきました。6月には、それまで関東を含む被災地の人を幅広く受け入れてくれていた雇用促進住宅が福島県限定になったり、福島県から補助を受けていた静岡や長野の旅館組合が、補助が打ち切りになったせいでペンションや旅館に無料で滞在できなくなったり、9月にはさらに県営や市営などの公営住宅への入居条件が厳しくなりました。県営住宅は、罹災証明があれば入居可能でしたが、10月からは「半壊以上」という条件がつくようになりました。それまでは、「一部損壊」でもよかったので、たくさんの人がそのおかげで放射能からの避難に利用できていたのです。2012年1月になると、半壊でも難しいところが増え、中にはもう入居を打ち切るという自治体も出てきました。公的支援がこのように減っていく中、顕著に増えていたのが、国外の受け入れ先でした。夏休みを機に国外へ避難する家族が増えました。一例ですが、アメリカではある地域のお母さんたちが協力してホームステイや生活サポートを交代でやってくれるグ

ポスト福島の哲学

ループも誕生しました。フランスでは、受け入れ提供者がネットワークを立ち上げていたのですが、日本への告知がうまくいかないので「hahako」と連携したいという申し出がありました。他にもマレーシア、カナダ、オーストラリア、タイ、ニュージーランド、スコットランド、フィジー、イギリス、香港、インドネシア、フィリピン、ネパールなど20カ国近くの国から受け入れの申し出がありました。特に2012年になって増えてきたのが、避難した母子が拠点を作ってそこで受け入れ活動を始めるというものでした。同じ日本人であり同じ立場の避難者であるということから、利用者も増えていきました。ただ、国外については仲介者が増えてきたことから、金銭や人間関係のトラブルが出てくるようになりました。現在、「hahako」にも多数の苦情が届いており、今後国外疎開の受け入れ先を掲載していくかどうかという課題に直面しています。利用者は、国外の情報が掲載されるサイトが「hahako」しかないということで、強く継続を希望するのです。利用形態も、ホームステイなどの短期的なものから、ルームシェアや賃貸など長期的な疎開が増えており、子どもの教育や親の資格・仕事なども条件に含め避難先を探す人が増えてきたのが現状です。

公的支援が受けられる人は利用可能なものを模索しますが、9月頃から「二次避難」も増えてきました。震災直後に衝動的に遠方に避難したが、お父さんが通うための費用が掛かりすぎる、または環境に馴染めないなどの理由で、もう少し東に戻るといったケース（例：福岡へ避難→大阪へ二次避難）。当時はすぐに戻れる距離のところに避難したが、原発事故で放射能漏れが公表されてからさらに西に避難した（例：埼玉へ避難→三重へ二次避難）ケースもあります。実際生活をしないとわからないこともたくさんあるようで、母子避難したが経済的に苦しくて勤め先を探したがまったくみつからない、避難先を探すときに就労しやすさも考慮すべきだった、というケースもありました。このような話を聞くと、地域を選ぶことはとても難しくなるようで、条件がいくつもありすぎて避難先・移住先が決まらないという人もたくさんいます。このような悩みを解決できるのは、やはり地域の支援者の存在です。一時的な避難ではなく、長期的な避難を視野にいれる際には、地域に支援者がいるということが重要になってきたと強く感じています。また、二次避難の問題点については、公的な支援を受けられる資格が一度きりという条件がついているため、二つ目の県に二次避難をした場合は支援を受けられないという問題も出てきました。

地元での受け入れ支援

「どこに避難したらいいのか？」というのが相談者の共通の悩みでした。知り合いがいない人は特に「支援者がいるところがいい」という希望が多かったのですが、当時は地域で受け

希望をつなぐ

入れ支援（住居や生活支援）をしている人は少なく、その中でも関東からの避難者となるとほんの数箇所しかありませんでした。これらのことがあって「地元四日市でも受け入れができないか」と考えるようになりました。前述のように 2011 年夏前には、公的支援が次々と打ち切りになり、夏休みに避難する予定だったのにできなくなったという相談が殺到したことや関東からの放射能避難に対しては、民間でもなかなか理解されず受け入れ支援が少なかったということもありました。「hahako」を通してたくさんの関東圏のお母さんとも話をしてきたので、その切迫した状況をなんとかしてあげたいと思いました。その当時に国内で関東圏の避難者を無償で受け入れるところは、民間で 2~3 箇所でした。あとは、自力で有料の賃貸などを探すしかなかったのです。莫大な費用がかかります。せめて部屋代だけでも無料で提供してくれるところがあれば助かると考え、四日市市役所を通して民間が提供している社宅を紹介してもらい、行政ではなくボランティアグループを通して社宅を提供していただけないかというお願いをしてもらい、そのうち話を聞いてもいいという会社を訪問しました。これらの社宅も震災による避難のための場所提供のつもりだったらしく、放射能避難や関東からの避難は想定外のようなものでした。家を失った人だけではなく、被ばくの危険性を考え避難する人が多いこと、関東からも避難先を探していることなど、現状を訴えました。

私が訪ねた 4 社のうち、2 社が理解・協力をしてくださることになり、2011 年 7 月より短期滞在のための社宅と、長期滞在と就労の支援をとりつけることができました。ところが、部屋は用意できてはまた別の問題がありました。福島県からの避難者には日本赤十字より家電 6 点セットが支給されましたが、それ以外の地域からの避難者はすべて自費で準備をしなければならなかったのです。部屋が見つかったとしても家電、家具、生活用品などは準備する必要があります。夏休みなどの短期間の避難のためにすべてを準備することは難しく、日赤の支援も一度しか権利がないのでゆくゆく移住や長期避難を視野にいれている人にとっては、短期疎開のためにそれだけの出費を強いられることで、疎開を断念することになってしまうのです。地域の支援者もこのことで悩んでいました。部屋は無償で準備できるが家電家具生活用品までは無償提供は難しい。そんなとき、四日市で生活物資の支援をしているグループがあることを知りました。元々は国際支援の NGO で途上国に支援物資を送っているグループ「NGO あい」でした。その活動は、不要な家電家具を募りそれを避難者に無償で提供するというもので、県営や市営に入居できる人も物資を自費で購入しなくてもよいのでたくさんの人が利用していたようです。

このグループと連携して、夏休みの短期疎開の準備を始めました。そして身の回りのものだけでもってければ疎開できるという環境をつくり、2011 年夏休みだけで 10 数組（30 名以上）を受け入れることに成功しました。A 社の社宅は、家電家具付の部屋を 4 部屋提供して

ポスト福島の哲学

もらっていたのですがあまりにも希望者が殺到したため、7 部屋に増やしてもらいました。光熱費や食費、雑貨などは自費でしたが、駐車場もあり喜ばれました。関東からの避難についても可能でしたので、申し込みと同時に 1 日で満室状態になってしまったくらいです。B 社の社宅は長期疎開を希望している人に入居してもらいました。家電家具は物資支援のグループが担当し、母子避難だったため、お母さんのパートの仕事も B 社が請け負ってくださり、はじめての長期避難者を受け入れることになりました。夏休みに A 社の社宅に入居した人の中には、岡山に一時避難したが環境が合わなかった、周りに避難者（同じ境遇の人）がいなかったのでとても辛かったという人、愛知に一時避難したが、ホームステイだったのでホストとうまく関係が築けず辛い思いをした人もいました。四日市に来て、集合住宅（社宅）で生活はプライバシーが守られながらも、近所はみな避難者という特別な環境があったので、すぐに打ち解け地域にも溶け込むことができました。短期避難者のうちの半分くらいがそのまま四日市に長期で滞在することを決め、現在もそれぞれの生活をされています。

このように、避難というのは生活がかかっていることもあり、実際少しでも住んでみないとわからない不安があります。いきなり「移住」となると、引越などのリスクがあるので。まずは短期疎開で様子を見る、という人が多かったのは、このような理由からでしょう。社宅での夏の短期受け入れがはじまり、電車でこられた方などは大きな買い物や病院などの送り迎えのサポート、親子で楽しめるイベントなども必要になってきましたが、最初は私一人でやっていたのを見て、大変そうだったのか手伝ってくださる人が増えてきました。また、遊び場を提供してくれたり、地域のお母さんたちとの交流の機会を作ってくれるグループもでてきました。こうして四日市での受け入れ支援活動が形になってきたので「支援ねっと@よっかいち」というネットワークとしてボランティアのサポーターを登録制にし、少しずつできることをやろうと続けてきたのです。活動を続ける中、四日市だけではなく三重県北部（菰野町や桑名市、鈴鹿市）などにも避難者が孤立していることがわかり、少し規模を広げて名称も「支援ねっと@みえきた」に変えました。もともとは「hahako」を通しての避難者だけを支援していたのですが、こうして四日市近隣の避難者にも呼びかけ、避難者同士のネットワークも作ったり避難者が自主的にイベントなどを催したりするようになってきました。

「hahako」の相談業務だけでは見えなかった、避難者の心境なども直接接することによっていろいろと見えてくるようになりました。ある程度地域に馴染んで生活も落ち着いてくると、今度は自立したいという気持ちが芽生えてくるのです。仕事をしたい。子育てサークルに参加したい。無農薬野菜の定期購入をしたいなどそれぞれの人が少しずつですができることをするようになりました。月に最低 1 回は避難者の交流会を開いていますが、参加者も少なく

希望をつなぐ

なってきました。ご近所のおじいさんおばあさんが自分の孫のように子どもたちをかわいがってくれる、とか困ったときに助けてくれるという経験が増えてきて、そういう地域の人との関係ができてきた人たちはもう「避難者」として扱われるよりも、自分も避難してくる人の力になりたいとサポーターに参加してくれる人も出てきました。新規で避難してくる人がいれば、自分たちが経験した不安や困惑がよくわかるだけに、相談にのったり力になったりしてくれるので、お互いよい関係が築けるようです。支援されるばかりの生活は惨めになるという話も聞きました。元気になって、自分らしく何かしらやりがいを見つけ、それぞれ生活されるようになってきました。ほとんどが母子避難でしたが、最近のご主人もこちらに引っ越してきたりというケースも増えてきました。今では年に 2 回ほど大きな交流会イベントを開催し、それに参加すると久しぶりにみんなに会えるという感じになってきました。

それぞれが通う幼稚園でも少しずつ避難者への理解が広まり、協力者も増えました。こうして、四日市での受け入れ支援は当初よりも落ち着いて、「どうしても困ったときは」程度の支援になってきています。

全国規模の支援者ネットワーク

「hahako」と「支援ねっと@みえきた」の 2 つの活動を通して、いろいろ学んだことはありますが、まだまだ避難できずに悩んでいる人たち、滞在することを選択したけれど食べ物・水などの影響を心配している人たちもいます。全国各地には受け入れ支援もたくさんできており、今は移住支援だけではなく、移住できない人のための「保養支援」という取り組みも増えてきました。それを継続しているグループが増えるほど、福島に滞在している人たちの希望は消えないのだと思います。1 年がたち移住できない人たちが少しでもリフレッシュできるようにと、全国の保養企画を紹介する取り組みをされていた方がいます。「保養相談会」という名前で福島県内の各地で相談会を開催し、そこには全国各地の支援者が直接ブースを出し、さまざまな相談に応じるというものでした。2012 年 2 月からはじまったこの取り組みでは、今まで別々に活動していた支援者同士がさらに幅広くつながれるのではないのでしょうか。「ソカイノワ」はどちらかというに移住支援ですが、たまに保養企画でも保養に来た人がそのまま移住したいという相談もあるようで、そうなったときに専門知識や経験がないと即答できなくて、相談者はあきらめてしまうという事態も起きていたようです。基本的に「移住支援」と「保養企画」は、まったく違う形の支援ですが、避難者にとっては「支援者」は、何でも相談できるという認識なのです。私も「支援ねっと@みえきた」で 2012 年夏休みにキャンプの企画に関わったのですが、4 泊 5 日で宿泊できる場所、バーベ

ポスト福島の哲学

キューや観光などの日程など本当に大変でした。参加者が集まるかどうかわからない中で、食費・交通費・宿泊費など費用がかかることばかりでした。毎日行事があるので人手もたくさんいました。短期集中型の支援になりますが、準備には数ヶ月必要ですのでやはり保養企画は保養企画専門のグループでやらないと難しいということを身をもって知りました。逆に保養企画をやっている、実際地域の保育園幼稚園の状況とか、就労の可能性とか無償で受けられる住居や物資のことについては知識や行政とのつながりがなければわからないため、相談されれば調べることは可能でも、普段からやりとりしている行政のパイプがあるのとないのでは大違いです。ということで、移住支援と保養企画はそれぞれの特性をいかして連携するのが一番いいのではないかという結論に達しました。そんなときに、福島で保養相談会をやっていた人たちが「311 受入全国協議会」という大規模な支援者のネットワークを立ち上げることになり、声をかけられて西日本からの共同代表を引き受けることになりました。2012年9月に立ち上がり、現在はまだ全国各地の支援者に呼びかけて、つながりを広げることに力をいれていますが、8つのワーキンググループでそれぞれの特性や経験を生かした活動を連携していくことを目的としています。移住疎開支援、保養支援以外にも、避難者支援法に特化したグループ、福島県内のローテーション保養、相談会、などのグループがあり、メンバーがそれぞれいずれかのグループに属し活動をしています。協議会に参加するにはある程度実績が必要ですが、その他にも「交流広場」という支援者のための敷居の低い交流の場を設置し、そこでそれぞれの活動紹介や相談などもできるようにしています。まだ、メンバーは募集している段階なので50人程度ですが、今後はもっと増やしていきたいと思います。まだまだ受け入れ支援は必要なのですが、公的支援は減る一方です。そんな中、こうして民間の地域の支援者たちが全国規模で連携するということが不安をお持ちの方々へ希望をつないでいきたいと思います。

あとがき

専門家でもなく、仕事と家庭を持った一般人の私でも「一歩」踏み出したことでたくさんの人と繋がることができました。思い返すと、毎日毎日未知の課題に直面しながら、目の前のことに必死でしたし、最初に述べたように、始めから大規模なネットワークを作ろうなどとは思っていませんでした。結果的にこうして全国規模のネットワークとして機能している背景には、たくさんの知人や地域の人とのつながり、ネットを通して活動に共感してくれた仲間とのつながり、そして何より相談者のみなさんとのつながりがあるのです。声を上げれば、人はつながっていくのだということを実感させていただきました。小さなことで

希望をつなぐ

も、実行に移してみることで、このように意外な結果になることもあるのです。希望を失わず今後も「できること」を続けていきたいと思えます。

参考情報

母子疎開支援ネットワーク「hahako」：<http://hahako-net.jimdo.com/>

ソカイノワ～疎開の輪～：<http://sokainowa.jimco.com/>

支援ねっと@みえきた：<http://shien-net-mie.jimdo.com/>

311 受入全国協議会（通称：うけいれ全国）：<http://www.ukeire.net/>